

Title	ドレスデンに「温泉」はあったのか？： E.T.A.ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について
Sub Title	Spekulationen über eine „heiße Quelle“ in Dresden : Das „Linkische Bad“ in E.T.A.Hoffmanns „Der goldene Topf“
Author	識名, 章喜(Shikina, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.99- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0099">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0099</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ドレスデンに「温泉」はあったのか？

—— E.T.A. ホフマン『黄金の壺』の  
「リンケ温泉」について——

## 識 名 章 喜

### 目次

0. はじめに
1. 石川道雄訳『黄金寶壺』—すべてはここに始まる
2. ドレスデン小説としての『黄金の壺』
3. 『黄金の壺』の「リンケ温泉」
4. 「リンケのパート」は「温泉」だったのか？—その歴史

### 0. はじめに

E.T.A. ホフマン (1776–1822) の代表作といえば、『黄金の壺』 („Der goldene Topf“, 1814 年刊) がよく知られ、邦訳の数も半端ではない。「新しい時代のメールヒェン」と副題の付けられたこの作品は、ホフマン自身が一時滞在した頃のドレスデンを舞台としており、随所に歴史的な地名や店名がちりばめられている。そのなかで初めて読んだときは違和感をあまり覚えなかったものの、後に気になるようになった場所がある。ホフマンも実際その近くに住んでいた「リンケ温泉 (原文 = Linkisches Bad/ 現地名 Linckesches Bad または Lincksches Bad)」である。日本に住む者にとって「温泉」という言葉は入浴法や効能はもとより、場所の醸し出す情緒と切り離せない。ここもそういう場所、あるいはドイツにも存在する「温泉保養地 (Kurbad)」のひとつぐらいに思っていた。しかし奇妙なことに、『黄金の壺』では、もっぱら外食や飲酒、社交団欒と結びつけて語られており、入浴に関する記述は皆無である。各種ホフマン全集の注やレ

クラム文庫版の注釈本<sup>1)</sup>を参照しても「人気の行楽地 (Ausflugsort)」, 「ガーデン・レストラン (Gartenlokal)」とあるので, 筆者は以前ルビを活用して「リンケ園」とし, あえて「温泉」のニュアンスを含まない訳語を打ち出してみた<sup>2)</sup>。また2008/2009年, ドレスデンに留学する機会を得たおり, かつて「リンケ温泉」があったと言われる地域を実際に歩いてみたが, 「温泉」の気配もなければ, 湯煙すら立っていない。「温泉」の訳語を否定した判断が間違っていなかったことを改めて確認したつもりだった。ところが2009年春に刊行された光文社古典新訳文庫の大島かおり訳『黄金の壺』を手にとり, 「リンケ温泉園」<sup>3)</sup>なる訳語を見るに及んで, これはいけない, 誰かがきちんと指摘しておかねばならない, と感じた。この作品を最初に訳した石川道雄以来, すべての翻訳者が判で押したように「リンケ温泉」の訳語を踏襲し, 「温泉」という言葉を残してきた理由はなにか? 現在はエルベ河沿いの遊歩道と住宅地と化したこの場所が, ホフマンの生きた時代にはたして「温泉」だったのか? 本稿では些細ではあるが, ひとつの地名の訳語が定着する過程を辿りつつ, 当該地の土地開発史やBad誕生に至る背景に焦点を当てる。次稿「入浴観の違いから生じる誤解」(『日吉紀要 ドイツ語学・文学』第48号掲載予定)においては, 固有名の翻訳にさえ大きな誤解の落とし穴があることを指摘し, あわせて訳語に関する筆者の提案も示しておきたい。

---

1) Paul-Wolfgang Wühl(Hrsg.): Erläuterungen und Dokumente. E.T.A.Hoffmann. Der goldne Topf. Stuttgart 1982, S.6.

2) リューディガー・ザフランスキー (識名章喜訳) 『E・T・A・ホフマン ある懐疑的な夢想家の生涯』, 東京: 法政大学出版局, 1994年, 299頁。原著では, Rüdiger Safranski: E.T.A.Hoffmann. Das Leben eines skeptischen Phantasten, München Wien 1984, S.280.

3) ホフマン (大島かおり訳) 『黄金の壺/マドモワゼル・ド・スキュデリ』, 東京: 光文社, 2009年, 11頁。

## 1. 石川道雄訳『黄金宝壺』——すべてはここに始まる

石川道雄（1900–1959）がホフマンの „Der goldene Topf“<sup>4)</sup> を『黄金宝壺』の題で本邦初訳したのは昭和2（1927）年3月、後に豪快な酒客としてもその名を馳せる「学匠詩人」の最初の単行本だった<sup>5)</sup>。石川訳は「骨太でしかも古雅な訳文によって、ロマン派の魂を日本語に刻みつけた名訳」であり、「その後のどの訳も及ばぬ、この作品の最高の翻訳」<sup>6)</sup>と絶賛されている。昭和9（1934）年、岩波文庫の一冊に加えられ、神品芳夫訳にとって代るまで40年もの間、定番訳の座を守り続けた。

ここ半世紀の間に登場した代表的な訳を挙げれば、筑摩書房版世界文学全集『ドイツ＝ロマン派』所収の中野孝次（『金の壺』、1963年）訳<sup>7)</sup>、岩波文庫の神品芳夫（『黄金の壺』、1974年）訳、旺文社文庫の大島かお

- 4) ドイツ語の題名表記には初版時の „Der goldene Topf“ とその後第2版（1819年）時の „Der goldne Topf“ の二つがあり、本稿は初出時の „goldene“ に従った。これは最新ホフマン全集（Deutscher Klassiker Verlag）が初版に基づく編集をしている方針に従ったからであり、ホフマン研究では後者の表記が多い。なお原典参照は上記DKV版に従った。E.T.A.Hoffmann: Sämtliche Werke in sechs Bänden. Band 2/1 Fantasiestücke in Callots Manier. Werke 1814. Herausgegeben von Hartmut Steinecke unter Mitarbeit von Gerhard Allroggen und Wulf Segebrecht. Frankfurt am Main 1993.
- 5) 石川の経歴その他のエピソードについては、次の2冊を参考にした。雑誌『古酒』、第二冊、「石川道雄君追想特輯」、東京：新樹社、昭和35（1960）年。山下 肇編『石川道雄詩集』、東京：大和書房、昭和40（1965）年。
- 6) 沖積舎より新装復刊された（ただし新字・新かな）『黄金宝壺』（2001年）の帯に寄せた文芸評論家川村二郎の推薦文。なお本稿では初出の南宋書院版を底本とする新装版から引用する。E・T・A・ホフマン＋石川道雄訳『黄金宝壺』、東京：沖積舎、2001年。石川訳からの引用末尾の（ ）内に頁数を示す。
- 7) 中野訳は終止一貫『金の壺』の訳を通し、1967年、河出書房版世界文学全集の一冊となった『ホフマン』に再録され、1974年の筑摩世界文学大系『ドイツ・ロマン派集』にも再再録される。

り（『黄金の壺』、1976年）訳、深田甫によるホフマン全集版（『ホフマン全集2 カロル幻想作品集Ⅱ』所収の『黄金の壺』、1979年）と数種類に及ぶ。1970年代に新訳が集中しているのは、ホフマン生誕200周年となった1976年前後にドイツ本国でホフマン関連書籍の出版が相次ぎ、また日本においては1968年の学園紛争以降の出版界で、マイナー文学の復権が唱えられ、正統派文学史では異端扱いされていた怪奇幻想文学に脚光が浴びるようになったためである。1984年にはジュニア向けにリライト翻訳される形で塩谷太郎訳・文『黄金のつぼ』が金の星社から刊行され、好評のうちに版を重ねている。そして2009年、「はじめに」で触れたように、旺文社文庫版の旧訳を全面的に改めた大島かおり訳が光文社古典新訳文庫の一冊として登場する。

古典名作が度々にわたり翻訳される場合、訳者個々人の文体の違いに味わいが出たり、作品解釈の変遷が訳文に反映されたりする。作品中の固有名（人名・地名・書名）については、初出時の歴史的・社会的背景を丹念に調べた実証研究の成果を基に批判版全集や学生版の注釈が時代とともに充実してゆくものだ。古典が現代に甦るということは、現代の読者の嗜好や理解力に合わせて手が加えられるということとどまらず、その作品をめぐる研究成果が十全に咀嚼されている、という前提があつての話である。残念ながら、日本においては外国文学の翻訳をめぐる、誤訳の指摘はしばしば話題になるものの、研究の蓄積を土台にした注釈に関する議論が少ないか、あるいはそういう細部への言及が不当に無視黙殺される傾向が強い。本稿ではホフマンの『黄金の壺』に地名として言及され、石川訳以来「リンケ温泉」と訳され続けている場所をめぐる問題を提起するものである。

石川道雄訳『黄金寶壺—近世童話—』は昭和2（1927）年、南宋書院から「奢覇都南柯叢書第一編」として刊行された。石川は英文学者にして幻想的作風で知られた耽美派の詩人の日夏耿之介（1890–1971）の高弟として、日夏の監修する雑誌「奢覇都」の編集に深く携わっていた。漢語とルビを多用し、泉鏡花ばりの酒脱かつ華麗な訳文は、戦前から日本の読者に

怪奇作家ホフマンのイメージを強烈に印象づけ、それ以降の独文学者に大きな影響を与えている<sup>8)</sup>。石川はホフマンの翻訳を数多く手がけ、『小夜物語』(1940年)、『ブラムビラ姫』、『胡桃割人形』(ともに1943年)、『ちび助ツァッヒェス』(1948年)、『悪魔の美酒』(1951年)と主要作品を矢継ぎ早に世に送った。石川自身も師匠の日夏をして「お化のホフマンは、石川のホフマンにして、ホフマンの石川は、生れ得て一片歌々詩と酒と節義の逸人なり。」<sup>9)</sup>と言わしめた個性派の学匠詩人であった。

こうして石川のホフマン訳は、石川(=ホフマン)作品と評されるほど一体化した独自の世界を形成し、原典からの訳語の選択についても、石川訳を踏襲するか、そこからどこまで離れられるか、一種の準拠枠を提供してきた。石川訳を絶賛する川村二郎も、後に自分で原典にあたってみると、「厳密性に関しては相当に疑点のあることも諒解した」と書いている。「にもかかわらず、その訳に固執したいのは、この隠逸風の詩人にしてホフマン研究家の、大正文学流の閑雅と寛闊を併せ持った訳文を愛するからである。おそらくより原文に忠実であるであろう戦後の新訳は、読んだことがない。」<sup>10)</sup>石川訳に代わる新訳を出した神品芳夫はその岩波文庫版『黄金の壺』「解説」において「石川訳をつねに座右に置いて参照し、ときとしては訳語を踏襲させていただいた。とはいっても、安易に旧訳に凭れたつもりは毛頭なく、たえず対決の姿勢で臨みながらも、どうしても脱帽せざるをえないところがあった」と述べ、「鷗外調の流れを汲む石川訳」の現代語訳としての「命数は尽きているけれども、その翻訳文学としての価値は不朽のものである」と書いている<sup>11)</sup>。

蛇足ながら、ヘルムート・ミュラーが『E.T.A. ホフマンの文体におけ

- 8) 川村二郎と前川道介は雑誌『幻想文学』17号(1987)の特集「ドイツ幻想文学必携」に寄稿し、石川訳『黄金寶壺』から受けた影響を語っている。同書、22頁および64頁参照。
- 9) 山下肇編『石川道雄詩集』、東京：大和書房、昭和40(1965)年、217頁。
- 10) 前掲『幻想文学』17号、22頁。
- 11) ホフマン作(神品芳夫訳)：『黄金の壺』、東京：岩波書店、1974年、188頁。

る常套性の問題に関する研究』で指摘するように、ホフマンの文章はいわゆる古典的な美文調でもなければ、贅肉をそぎ落とした堅固な文構造（例えばクライストのように）を特徴とするものでもなく、むさぼり読まれるように「型にはまった (formelhaftig)」常套句に満ち溢れている。感情の高揚や葛藤が、さながら音楽における主題を構成する楽句のように定型的な表現で繰り返される。訳語が一定の表現に固定化されるべきところを、石川訳のように文脈に応じて華麗に文飾してしまうと、逆にホフマンの文体にそなわっていたリズムが損なわれる可能性もある<sup>12)</sup>。

## 2. ドレスデン小説としての『黄金の壺』

『黄金の壺』は、ホフマンがゼコンダ巡回歌劇団の楽長として指揮活動していたわずか一年ほどの時期に、執筆された中篇の物語である。ライプツィヒとドレスデンを拠点にする劇場の監督だったヨーゼフ・ゼコンダからの招聘は1813年2月末、1813年4月25日にドレスデンに到着するも、劇団はライプツィヒで公演中であり、ホフマンは5月20日にはドレスデンを後にする（同日マイセン付近での駅馬車事故で妻のミッシャが負傷する不運にも見舞われる）。再び劇団とともにドレスデンへ向けて出発するのが6月24日、8月末のドレスデン攻防戦を体験し、再びライプツィヒの公演のためにドレスデンを永久に離れるのが、12月9日である。『黄金の壺』はドレスデン攻防戦の始まる前、8月10日付けのクンツ宛て書簡でそのアイデアが表明され、ドレスデンが普露連合軍に対し降伏し、その占領下に入った11月、日記には「病気で自宅——しかしメールヒェン『黄金の壺』にはめでたく着手」（11月26日）とある<sup>13)</sup>。作品を書き上げたのは、翌1814年2月15日、ライプツィヒでの公演が続く最中、「メール

12) Helmut Müller: Untersuchungen zum Problem der Formelhaftigkeit im Stile E.T.A.Hoffmanns. Bern 1961.

13) E.T.A.Hoffmann: Tagebücher. Nach der Ausgabe Hans v. Müllers mit Erläuterung herausgegeben von Friedrich Schnapp. München 1971, S.237.

ヒェンの無事完成をパンチ酒で祝う、15日メールヒェン『黄金の壺』を書き終える、それも妻の用意してくれたパンチ酒のグラスを傾け、じつにご機嫌な気分が無事に<sup>14)</sup>と日記に書き込んでいる。その後ゼコンダと採めて楽長職を解かれるのが26日、暇になったホフマンは3月4日に『黄金の壺』の清書を完了させ、11月、全4巻からなる『カロ風の幻想作品集』の第3巻（第VII篇『黄金の壺』でまるごと1巻分を構成）としてバンベルクの書肆クンツから出版された。成立の経緯を辿るとこの作品が、対ナポレオン解放戦争の戦火のなかで構想され、公演の合間に書き継がれ、わずか二ヶ月半ほどで一気呵成に書き上げられたことがわかる。

「新しい時代のメールヒェン」（石川訳では「近世童話」、ただし沖積舎復刻版では副題がはずされている）と副題のついたこの作品は、民間昔話のような無時間的超越的な説話空間で展開されるのではなく、「昇天祭の<sup>ひる</sup>午下り、三時とおぼしき頃、ドレスデンの<sup>まち</sup>市で一人の若い男が「黒門」を走り抜けた、かと思える間に、醜い老婆が<sup>あきない</sup>商売に出して居る林檎や菓子に入った籠めがけて真直ぐに跳び込んだ。」（石川訳、8頁）で始まる有名な冒頭の一行からも明らかのように、あらかじめ「ドレスデン」であることが示されている。「黒門」の<sup>シュワルツエ・トール</sup>みならず、「王城街」、<sup>ノイマルクト</sup>「新街」、<sup>ゼートール</sup>「モーリッツ通り」、<sup>シュワルツエ・トール</sup>「滄溟門」、<sup>シュロスガッセ</sup>「エルベ橋」などの具体的な地名や「酒舗コンラデイ」<sup>15)</sup>、「ゴルデネル・エンゲル館」や「ヘルム屋」「ナウムブルグ町旅館」（以上石川訳による）といった店名・

14) Ebenda, S.247.

15) 原文は「Schloßgasse in Conradis Laden」となっており、主人公のアンゼルスが景気づけに「健胃焼酎」<sup>マージンリキユール</sup>を一杯ひっかける店になっているが、東独版ホフマン全集の注では「1812年のドレスデンの住所録によれば、シュロスガッセ252番地にあったケーキ職人ヴィルヘルム・コンラデイの所有する菓子店(Konditorei)」とある。E.T.A.Hoffmann: Gesammelte Werke in Einzelaugaben 1, Fantasiestücke in Callots Manier, Textrevision und Anmerkungen von Hans-Joachim Kruse, 2. Auflage, Berlin und Weimar 1982, S.526.



ホテル名がちりばめられ、いくばくかの同時代性が刻印された「メールヒェン」だった。

ただホフマンがこのドレスデン小説とも呼べる『黄金の壺』に仕掛けた地名や固有名詞のトリックにも注意を払う必要がある。冒頭を飾る有名な「黒門 (Schwarzes Tor)」だが、ここは市門としてはすでに 1812 年にとり払われており、ホフマンが住んでいた頃から半ば廃墟と化していた<sup>16)</sup>。つまりホフマンはこのドレスデン小説を発表の 1814 年の同時代ではなく、まして彼が住んでいた 1813 年の出来事でもなく、それ以前の近過去の物語として書いていたか、あるいは副題に隠された意を汲めば、過去でもなく同時代でもない無時間を彷徨う、ありうべき「新しい時代」のドレスデンを描いたことになる。ドイツ古典叢書 (DKV) 版の新ホフマン全集の注解では、人々の土地の記憶に訴えることのできる少しばかり昔の話とする説を退け、「黒門」を幻想世界への入り口として象徴的に解釈する可能性を示唆している<sup>17)</sup>。一見同時代であるように見せかけながら、『黄金の壺』の説話空間はやはり「メールヒェン」なのである。ホフマンがこの作品を執筆していたのは、対ナポレオン解放戦争の真っ只中であつた。当時のザクセン王室はやむをえずナポレオン側についたため、ドレスデンは普露境連合軍の包囲網の最前線にあり、絶えず砲火にさらされていた。だが『黄金の壺』に描かれる同時代とおぼしきドレスデンは、徹頭徹尾戦争の惨禍とは無縁な世界である。その凄惨をきわめた戦場の様子を、ホフマンはドレスデン攻防戦後の 1813 年 12 月に、『黄金の壺』の執筆を一時中断し、『ドレスデン近郊の戦場で見た幻 (Die Vision auf dem Schlachtfelde bei Dresden)』というエッセイ風散文にまとめている。そこに描かれた「血まみれの死体と瀕死の負傷者に覆いつくされた」<sup>18)</sup> エルベ河畔の惨状

16) E.T.A.Hoffmann: Sämtliche Werke, Band 2/1, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1993, S.779.

17) Ebenda, S.779.

18) Ebenda, S.479.

は、メールヒェンからは見事なまでに排除されている。その意味で『幻』は『黄金の壺』をポジとすれば、ネガに位置づけられる作品だろう。言い換えれば、平和な日常が虚構に見えてくるような戦火のなかで構想され書かれた非現実の「メールヒェン」なのである。詳説は省くが、一見ルポルタージュ風の反ナポレオンのアジビラ文書にしても、『幻』と題が付くように、悪夢なのか現実なのか判然としない、どこか創作めいたところがある。作品中の固有名についても、このようなホフマン文学の意図された虚構性を前提に論ずるべきであることは言うまでもない。

蛇足ながら、『黄金の壺』の作品解釈で「ロマン派の自然哲学」や「現実と幻想の二層構造」、「自我の二重性」、「詩人（芸術）と俗物市民」といった基本主題や二項対立の図式に回収したがるのがドイツ文芸学の悪弊で、私見ながら、この作品も含めホフマンの世界は徹頭徹尾テキストの表層レベルにこだわって読んだ方が開けてくるような気がしてならない。江戸川乱歩を通してかつて松山巖が1920年代の東京を読んだように（松山巖『乱歩と東京 1920 都市の貌』、東京：パルコ出版、1984）、『黄金の壺』を通して19世紀初頭のドレスデンを深読みすることが面白くないはずはない。古文書管理官のリントホルストの屋敷はどこにあるのか？ 大学生アンゼルスはそもそもどこに住んでいるのか？ それは書かれていないだけに、書かれた地名と照らし合わせたくるのである。本稿もそういう試みの補助線となれば幸いである。

### 3. 『黄金の壺』の「リンケ温泉」

作品冒頭、<sup>シュヴァルツェ・トール</sup>「黒門」で、林檎売りの老婆の籠に蹴踠く失態を演じた主人公の大学生アンゼルスが、罵声を浴びせられながらほうほうの態で逃げ出す先にあるのが問題の「リンケ温泉」である。石川訳でここを辿ってみる（引用文中当該訳語の部分に太字にする）。

此で、此の大学生はリンケ温泉へ続く並樹路の殆んど末端<sup>はて</sup>まで来た頃には

もう呼吸がすっかり切れて了いそうになった。(石川訳, 9頁)

ここでは、まだ「リンケ温泉」がどういう場所なのかわからない。すこし先に具体的な描写が出てくる。

…やがてリンケ温泉の入り口にたどり着いた。其処では晴れ着を纏った人々が陸続と列をなして入って行くのであった。内部からは笛や喇叭の音がしきりと聞こえ、愉快そうな客達の雑踏は益々たかまって行くばかりである。それを傍で見て居る此の気の毒なアンゼルスは、もう殆んど涙が泛かんで来そうであった。彼は毎年の昇天祭を特別楽しい家族的な祭日だとして居るので、自分とても此のリンケ楽園の団樂に加わるつもりで、いや其れのみならずラム酒の入った珈琲を半杯と、麦酒を一壺ぐらいは飲むつもりで居たのであった。… (石川訳, 10頁)

ホフマンは「リンケ楽園 (Paradies)」と言い換えているが、「温泉」場であるかどうかはともかく、ある種の盛り場であることは一読して明らかだ。キリスト「昇天日」の祭日 (Himmelfahrttag) であるなら、ちょうど五月半ば、春と夏が一緒に到来したかのような、ドイツで最も美しい季節であり、屋外のビアガーデンの賑わいも容易に想像できる。

この「リンケ温泉」の原文のドイツ語はどうなっているのだろうか。文脈上2格(「リンケ温泉の入り口」)や3格(「リンケ温泉へ続く」)の形になっているが、1格で示せば、„das Linkische Bad“である。Linkischは大文字書きで、これが「不器用な」を意味する形容詞 linkischではなく、固有名の形容詞とされている。実はここに、今まで誰も指摘していないことだが、ホフマンが地名に仕掛けた悪戯が、小さな罫がある。この場所は地元の記述では正しくは„Linke'sches Bad“であり、ホフマンは明らかにどうにもついでない「不器用な (linkisch)」主人公を、「linkisch」な場に連れ出さずにはおかないのである。これは単なる表記上のミスではあ

るまい。だからといって巧まざる虚構性を演出しているわけでもない。なぜなら日記や書簡でも同じ綴りの間違いを犯しているからだ。誤記を誤記のまま書いて放置しているのは多分に意識的である。ホフマンは洒落が氣に入ったのである。

さてその「Bad = 温泉」であるが、「入り口」とあるからには、塀や囲いのようなもので仕切られた区画にちががなく（次の「第二夜話」には unter einem Holunderbaum bei der Linkeschen Gartenmauer 「リンケの庭塀のそばのニワトコの木陰で」とあるのだが、石川訳 26 頁では「リンケ楽園の傍にある紫丁香花の樹の下で」と省略されている）、また「リンケ楽園の団欒に加わる」という表現から、ここが連れ立った団体客の多い行楽の場であることも確認できる。また主人公が自分のツキのなさをかこつ個所に「リンケ温泉」での正しい振舞い方が暗示されている。

…己は此の楽しい昇天祭の一日を全く愉快な気持で祝うつもりで居たのだ。金なんぞも相当に費<sup>はら</sup>うつもりで居たのだ。己だって他の客人<sup>な</sup>みに、リンケ温泉で威張<sup>は</sup>ってこう云える筈<sup>は</sup>だったのだ。『おい給<sup>マルキユール</sup>仕<sup>ドッペルビール</sup>一濃厚麦酒を一壺——一番好いやつをね！』そうして己は其処<sup>ゆ</sup>に寛<sup>ゆ</sup>くりと、晩おそく迄座<sup>ま</sup>って居ることが出来る筈<sup>は</sup>だったのだ。…（石川訳、12-13 頁）

日の長くなった季節に屋外のビアガーデンで大いに飲んで気炎をあげる心積もりだったのだろう。これもドイツの夏によく見かける典型的な光景のひとつである。『黄金の壺』は全体が 12 の「Vigilie (夜話)」という章立てで成り立っているが、その「第五夜話」には大学生アンゼルスに思いを寄せるパウルマン副校長の娘ヴェローニカが、アンゼルスが宮中顧問官になったあかつきには、上司となる枢密顧問官夫人から「今日リンケ温泉へいらっしゃいませんか」（64 頁）と誘いの言葉をかけてもらえるのだ、と夢見るシーンがある。「リンケ温泉」が上流階級の社交場であったことをうかがわせる一節だ。また「第八夜話」では、無事に奇怪なアラビ

ア文字の浄書のアルバイトを終えたアンゼルスに、古文書管理官のリントホルストがねぎらいの意を込め「……扱<sup>さ</sup>てこれからひとつリンケ温泉へ出かけましょう——儂の後を随いていらっしゃい」（121頁）と声をかけるのだが、途中たまたま出くわした書記のヘルブランドまでが随いてきて、「リンケ温泉で……濃厚<sup>ドッペルビール</sup>麦酒をしたたか呷」（122頁）り、見苦しく泥酔する。

作品中の場所として登場する「リンケ温泉」は、ほぼ以上に尽きるのだが、引用箇所はすべて飲酒や外食に関わっており、「入浴」を示唆する記述は皆無だ。そこは本当に「温泉」場だったのだろうか？ 石川訳が底本としたマーセン版ホフマン全集は、未完に終わったものの、校訂の綿密さで未だに価値を失わないホフマン研究の里程標となった全集であり、その後編纂されるホフマン全集はすべてマーセンの校訂・注釈を出発点にしていると行ってよい。その注釈に „das Linkische Bad“ についてかなり詳しい解説があるので、全文を引用しておく（以下、この地名に関しては「リンケのバート」とし、場合によってLBと略記する）。

ホフマンの時代、まだ市外地にあり、ドレスデンの人々が足繁く通った行楽地（Ausflugsort）。リンケのバートの様子を活き活きと描写するのは、Fr.Ch. A. ハッセが匿名で出版した『ドレスデンとその周辺』（ピルナ、1801年）である。「読者諸兄はリンケのバートに到着する。ドレスデンの美男美女、名士の集まるお気に入りの場所だ。日曜の午後ともなれば、王都に住まう著名人や若い娘たちで賑わう。背の高い菩提樹の木々が頭上をおおう並木道が続く。その樹木の間を老いも若きも好奇心をむきだしに、あたりをうかがっている。ありとあらゆるお楽しみがここにはある。見るもの聴くもの一呼吸一呼吸に、かのプラトンが言うところの、神々が人間の労働の代償として与え給うたものを感じとることができる。そのうえここなら気晴らしをするのに金も要らない！ 空気そのものが愉悅を運んでくれる。庭園には東屋や自由に座れる場所が所狭しと用意され、その間を

ぬって人々の流れがゆったりと四方八方へと波打ってゆく。演奏会の楽音が遠くからぼんやりと聞こえてくる。〔ゼコンダの興行する〕劇場裏の高台へと逃れてゆけば、眼下に美しく広がるエルベの河原を一望することもできる。』(245頁)<sup>19)</sup>

石川もおそらくこの注釈を参考に「リンケ温泉」の訳語を選んだのであろう。マーセンによる解説はその後多くの全集や単行本の注解に踏襲されてゆくが、ここから最低限読みとれるのは、LBが「行楽地」や「ピクニックの目的地」であり、特に「金も要らない」憩いの場とされている点であり、「温泉」という訳語から想起される雰囲気とはまったく結びつかない。はたしてドレスデンにも温泉が湧いたのだろうか？ 「リンケ温泉」と訳されてあれば、日本の読者が普通に読めば、有馬温泉や草津温泉、鬼怒川温泉のような湯治客で賑わう温泉歓楽街と理解するのが自然であり、筆者も翻訳で読んだ当初、ここもそういう場所としてあったのだろう、と勝手に思っていた。日本の温泉地に歓楽街はつきものであるから、ピアガーデンの賑わいや劇場の存在も違和感はあまりない。しかしながらエルベ河畔のドレスデンは低地に位置し、周囲に火山はない。ローマ人によって温泉地として開発されたドイツ南西部のバーデン＝バーデンやゲーテがたびたび保養に訪れたことで知られるチェコのカールスバート（カルロ・ヴィヴァリ）などと違い、そこに外国からの観光客も含め大勢の湯治客を惹きつけた豊富な鉱泉源がある（またはあった）という話も聞かない。カールスバートは神聖ローマ皇帝カール4世によって14世紀から開設された温泉保養地で、エルベ河支流に位置し、42～72℃の泉源に恵まれた湯治場として発展した。ドレスデンの「リンケ温泉」も本格的温泉、あるいは鉱泉の湧く場所だったのだろうか？ ホフマンの描写にもマーセンの注

19) E.T.A.Hoffmanns sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe mit Einleitung, Anmerkungen und Lesarten von Carl Georg von Maassen, Erster Band, München und Leipzig 1908, S.495f.

釈にも、ここがカールスバートに匹敵する湯治場だったことを匂わす記述はない。

石川訳以後、昭和11(1936)年に刊行された三笠書房版ホフマン全集第2巻所収『黄金の壺』(第6夜話まで吉田豊吉・第7夜話以降藤原 肇訳)では「リンケ温泉場」、1963年の中野孝次訳は「リンケ温泉」、神品芳夫訳の岩波文庫版(1974年)も「リンケ温泉」としている。旺文社文庫(1976年)の大島かおり訳、深田甫の全集版訳(1979年)も「リンケ温泉」が踏襲されている。小中学生向けに訳し直された塩谷太郎訳・文『黄金のつぼ』(金の星社、1984年)も「リンケ温泉」。日本で初の本格的ホフマン伝を発表した吉田六郎の『ホフマン—浪漫派の芸術家』(1971年)には『金の壺』を論じた一章があるが、そこでも「リンケ温泉」という表記をとっている<sup>20</sup>。

Linkisches Bad に関し、マーセンのものからさらに踏み込んだ注釈が付いたのは、ホフマン復興というかホフマン研究が大きな活況を呈した1970年代からのことである。1976年の生誕200周年を節目に、西ドイツでヴィンクラー社から全集・書簡集・判例集・日記・ホフマン証言資料集が相次いで出版され、研究のための基本的文献が整備された。例えばヴィンクラー版のヴォルフガング・クローンによる注釈では、この「メールヒェンが執筆当時のドレスデンを舞台としており、登場する地名はその多くが歴史的なものである」と断ったうえで、LBについては、「黒門の前、ドレスデン市外にあった有名な行楽地」とされている。それに続けて「LBを度々訪れたホフマンだが、バンベルクからドレスデンに到着した翌日に(1813年4月26日)にここで、思いがけず旧友のヒッペルに再会している。日記を参照のこと。」とある<sup>21</sup>。その『ホフマン日記』は、

20) 吉田六郎『ホフマン—浪漫派の芸術家』、東京：勁草書房、1971年、353頁。

21) E.T.A.Hoffmann: Fantasie- und Nachtstücke, herausgegeben und mit einem Nachwort von Walter Müller-Seidel, mit Anmerkungen von Wolfgang

在野のホフマン研究者フリードリヒ・シュナップの詳注、索引つきで1971年に出版されている。ちなみにシュナップの本業は録音技師で、戦前はベルリンの帝国放送、戦後は北ドイツ放送に勤め、指揮者フルトヴェングラーの信任が厚かったことで知られる。シュナップは、同じくホフマン研究者だったハンス・フォン・ミュラーの文献学的作業を引き継ぐ形でホフマンに関する資料を長年にわたり網羅的に収集・整理した。この地名が初めてホフマンの日記に記された個所（「リンケのバートにてヒッペルに会う（im Linkschen Bade Hippel）」）に以下の注を付している。

ドレスデンの人々に愛好された、エルベ右岸に位置する行楽地。ホフマンは『黄金の壺』でも度々言及している。名前は消費税担当顧問官（Akzisrat）のリンケ（Linke）に由来する。リンケは1776年、飲食店と一体化していた旧レーマンのバート（das Lehmannsche Bad）の隣に夏場専用の劇場を建て、そこでゼコンダの歌劇団が上演を行なった。（ちなみにホフマンは、そこでは一度も指揮をとっていない。ゼコンダ歌劇団は1813年6月に、11月まで王立劇場での公演を許可されたからである。）<sup>22)</sup>

ここで指摘されているのは、「リンケのバート」にあったと言われる劇場のことである。19世紀前半のドレスデンの音楽史を語るうえで必ず言及されるこの劇場を活動の拠点としたのが、ホフマンを楽長として雇ったヨーゼフ・ゼコンダの巡回歌劇団である。しかしシュナップの注釈を読んでも、旧「レーマンのバート」が「温泉」と関係があったかは不明のまま。レーマンのバートの名前がドレスデン市史に登場するのは、リンダウが著した浩瀚な歴史書『王城都市ドレスデンの歴史、最古の時代より現代

---

Kron, München 1976, S.789.

22) E.T.A.Hoffmann: Tagebücher. Nach der Ausgabe Hans von Müllers mit Erläuterungen herausgegeben von Friedrich Schnapp, München 1971, S.408.



まで』（1862, 1884）である。リンダウは18世紀のドレスデンの劇場史を振り返りながら、脚注として「リンケのパート」について次のように触れている。

…ザイラーの一座〔筆者注一ヴァイマルの宮廷から客演にきた演劇団体〕は1776年5月22日に「リンケのパート」に夏場用の劇場を開いた。ここは消費税担当顧問官（Accisrath）のリンケ（Linke）が宮廷の許可を得て同年の3月に建設したものだ。すでにそれ以前からリンケの（かつてはレーマン）のパートでは、メルシイ（Mersch）なる人物（1774年にシェンブルンに6～10歳の児童による劇場を開いた人物）が私費を投じて木造の小屋を建てていた。しかし1775年5月22日、観客の入りが悪く興行を停止していた。…<sup>23)</sup>

しかしこの記述では、夏場の劇場の存在と興行の歴史に力点が置かれ、「リンケのパート」がそれ以前は「レーマンのパート」と呼ばれていた、という情報が確認できるにすぎない。ただ旧名まで遡った点で、おそらくシュナップの注釈の典拠のひとつであるにちがいない。

ドレスデン在住の歴史家から当時の地名に関する詳細な報告が発表されたのは『E.T.A. ホフマン協会年報』第33号（1987年）掲載のハインツ・ホッペ論文であった<sup>24)</sup>。ホッペの考証はその後ドイツ古典叢書（Deutscher Klassiker Verlag）の最新のホフマン全集の注釈でも重要な参照文献として挙げられている。ホッペはドレスデンの古地図と発表当時（東独時代の末期）の地形を慎重に重ね合わせ、ホフマンのドレスデン滞

23) W.B.Lindau: Geschichte der königlichen Haupt- und Residenzstadt Dresden von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart. Zweite, verbesserte Auflage, Dresden 1885, S.597.

24) Heinz Hoppe: Der Wohnort in den Sternstunden des Romantikers. E. T.A.Hoffmanns Logis vor dem Tore Dresdens. In: Mitteilungen der E. T.A.Hoffmann-Gesellschaft, Bamberg 1987, S.1-17.

在時の住居の特定を行ない、『黄金の壺』の舞台裏を明らかにした。特に1813年6月26日に転居した「リンケのパートに通じる並木通りの庭師フーアマン」宅を突き止めた功績は大きい。場所についてはホフマン自身がバンベルクの医師シュパイヤー宛の1813年7月13日付書簡で詳しく報告しており、多くの伝記に引用されているあまりに有名なくだりを以下訳出しておく。

ドレスデンに今、居を構えております。—それも田舎に！—黒門の前の砂地の上にある並木通りの家で、並木道はリンケのパート〔筆者注——„...dem Linkischen Bade“と作中と同じように誤って綴っている。〕に続いています。葡萄の葉に縁どられた我が家の窓から、見事なエルベ河岸一帯が広々と望めます。おだやかに流れる川向こうにザクセンのスイスの一部、ケーニヒシュタインやリーリエンシュタインの山々が見渡せるのです。玄関口から20歩ばかり、気の向いたときに外に出れば、ちょっと帽子をかぶって、室内履きのままパイプを啜るだけの恰好で、眼前には教会の丸屋根や尖塔の立ち並ぶ素晴らしいドレスデンの街並みが広がっているのです。その向こうにはエルツ山地の岩山が遠く聳えています。さらに足を延ばそうと思えば、板張りのザロッペとか、一静かな音楽、陽気な葡萄摘み、スペイン風の襟—などなど実に滑稽な名前の居酒屋に身体が向いてしまう。みなエルベ河畔の葡萄山の近くに構えた店で、気分転換にもなるし、付き合いにもってこい。こんな大きな楽しみを私は、週に3回—マイル、週に4度は半マイル〔筆者注——ドイツ・マイルが7～9キロ〕の距離をてくてく歩く代償を払って手に入れているわけです。どういうことかと言えば、練習や公演のための往復であって、片道半時間はかかります<sup>25)</sup>。で

25) ホフマンは友人や知人への手紙では、概して大袈裟または美化して語る傾向があり、注意を要する。クラウス・ギュンツェルが書いているように、実際にホフマンがこの住居から町へ向かって公演場所の王立歌劇場に通うのには2キロ、黒門のマルクトまではわずか1キロの距離だった。Klaus

も喜んでやっています。健康にいいし、食事や一杯の地元産葡萄酒の美味しいこと—麦酒は、しばらく前から不味くなって飲めません。麦酒のなかに蛙が入っていたとしても、気付かないでしょう。—<sup>26)</sup>

上記のような書簡や日記の記述を基に、伝記作家らがホフマンのドレスデン時代を再構成するのは当然のこととはいえ、ホッペは「住居のあった場所の正確な位置を知らぬまま」、いわば検証抜きに引用が行なわれてきた点をさりげなく指摘する<sup>27)</sup>。このやや婉曲な批判は、地元の地誌に詳しくない研究者や翻訳者がマーセン版やシュナップの注釈だけを頼りに、「リンケのパート」についておごりな対応を繰り返してきた姿勢にも当てはまるのではないだろうか。

ところでホッペはその論文でホフマン研究において初めて「リンケのパート」の全体像を描いた版画を紹介している〔図1参照〕。ホッペはこの図版についてのみ出典を明示していないが、1905年に出版されたオットー・リヒター編の写真集『ドレスデン今昔』の「49. Das Linckesche Bad」掲載のものと同ーである<sup>28)</sup>。この本は1820年代の版画と20世紀初頭に撮影された写真を左右の頁に並べ、町が世紀をまたいでどのように変貌を遂げたかを示した写真集であった。ホッペは版画のキャプションで「左：プリースニッツの小川がエルベ河に流れ込む合流部」「中央：入浴施

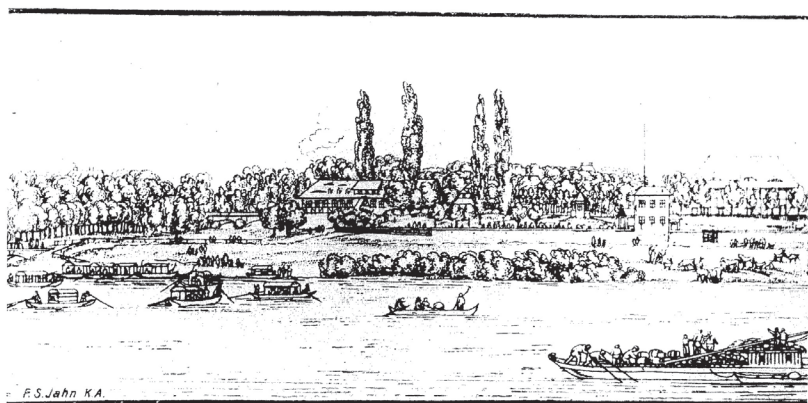
---

Günzel: Romantik in Dresden. Gestalten und Begegnungen. Frankfurt am Main und Leipzig 1997, S.75.

26) E.T.A.Hoffmann: Sämtliche Werke in sechs Bänden. Band 1 Frühe Prosa / Briefe / Tagebücher / Libretti / Juristische Schrift Werke 1794–1813. Frankfurt am Main 2003, S.291f.

27) Hoppe: A.a.O., S.4.

28) Otto Richter(Hrsg.): Dresden sonst und jetzt. 50 Doppelbilder in Lichtdruck nach alten Radierungen und neuen Aufnahmen. Dresden 1905. なお論者が参照したのは edition Sächsische Zeitung からのリプリント版(2007年)である。リプリント版では左右に分かれていた版画(左)と写真(右)が同一頁の上下に印刷されている。



*Das Linksche Bad bei Dresden*

*Das Linksche Bad*

*Links: Einmündung des Prießnitzbaches in die Elbe*

*Mitte: Badeanlage, Rechts: Theaterbau*

*Zwischen den beiden Gebäuden die abschließende Mauer zum Elbstrom.*

*Ort der Szene „Träumen unter dem Holunderbaum“*

図1：リンケのパート（出典：ホッペ論文）

設（原語 „Badeanlage“）、右：劇場の建物、「二つの建物の間、エルベ河沿いに仕切りの壁」と記し、アンゼルスが「ニワトコの木陰で夢見る場面の舞台」と説明を加えている<sup>29)</sup>。図1中央の建物からは煙が上がっているのも見える。するとここにはやはり「温泉」、もしくは何か「浴場」のようなものが存在したのだろうか。

話がややこしくなるのは、ホッペ論文と同じ版画を載せた写真集『ドレスデン今昔』では1905年の写真と並べ、「左：プリースニッツ河口。右：劇場。中央にはレストランの庭園 („Restaurationsgarten“）」と説明している点である。ホッペの論文も「リンケのパート」なるものが「温泉浴場」だったのか、エルベ河畔の「水浴場」の一種なのか、「レストラン、飲食店」なのかははっきりさせていない。謎はかえって深まる一方なのである。

29) Hoppe: A.a.O., S.11.

#### 4. 「リンケのバート」は「温泉」だったのか？——その歴史

ドレスデンはホフマンの時代以前・以後も都市の拡張・再開発が頻繁に行なわれ、また三〇年戦争（1618～48年）、七年戦争（1756～63年）、対ナポレオン解放戦争時のドレスデン攻防戦（1813年）、第二次世界大戦と度重なる戦火に見舞われ続けた町である。ことに1945年2月13日の空襲によって町は徹底的に破壊された。ホッペが論文でホフマンの旧居跡を特定した「外ノイシュタット」と呼ばれている地区にしても、『黄金の壺』の舞台となった往時の面影はない。また1990年の再統一後は、2005年のフラウエン教会の再建に象徴される文字通りの戦後復興が本格化し、町全体がたえず変貌を重ねている。現在のドレスデンで200年前の土地の記憶をとどめ、『黄金の壺』のなかでそこがどうしても固有名で名指されねばならないアウラのようなものかをかろうじて漂わせている場所は多くない。だからこそ戦災前のドレスデンの建造物の所在とその歴史を詳細に記録したフリッツ・レフラーの分厚く重たい『古きドレスデン。その建築の歴史』が1955年の刊行から絶えず版を重ね、今なおドレスデン市民に



写真1：筆者撮影（2010年8月）



図 2 (1852 年)



図 3 Falk Cityplan Dresden, 4. Auflage

とっては一家に一冊の隠れたベストセラーになっているのである<sup>30)</sup>。

「リンケ温泉」と訳されてきた場所も今は跡形もなく、現在のエルベ右岸（下流に向かって）には遊歩道の続く河川敷が延びているだけであり、「温泉」が存在するような気配すらない〔写真1〕。図2は前記レフラーの本に付録としてついている1852年改訂の「ドレスデン・ノイシュタット平面図」の、図3が現在のFalk社の市街図（第4版）のものである。1852年の地図には「リンケ」の名こそないが、das Badと記され、奥には劇場の建物が確認できる。

19世紀半ばまで地名にBadという言葉が残って人々がそのまま慣用化して使っていたのは、エルベの河辺に位置していた以上、なにか「水を浴びる」ことに関係があったのではないかと推測できよう。そのところをもう少し詳しく追ってみよう。東ドイツ時代に出版され、統一後も改訂増補されてきた『ドレスデン市事典 AからZまで』に「リンケのバート („Linckesches Bad“)」の見出しで比較的詳しい記述がある。それを以下訳出引用してみる<sup>31)</sup>。

バウツェン通り（1859/1921年はシラー通り）とエルベ河岸の遊歩道の間、プリースニッツ川がエルベ河に注ぎこむ河口左側にあった広大なガーデン・レストラン。18/19世紀にはドレスデンの人々の間で一番の行楽地のひとつだった。「黒門前の砂地の（auf dem Sande vorm Schwarzen Tore）」土地を1734年ゲオルク・フーベルト・フォン・ディースバッハ Georg Hubert von Diessbach少将が取得、植林のうえ農場を作らせた。次の所有者は1753年に当局より醸造・製パン・屠畜・酒類販売許可を得た。1764年医師ペーター・アンブロージウス・レーマン Peter Ambrosius

30) Fritz Löffler: Das alte Dresden. Geschichte seiner Bauten. Leipzig 1982.

31) Folke Stimmel, Reinhardt Eigenwill, Heinz Glodschei, Wilfrid Hahn, Eberhard Stimmel, Reiner Tittmann(Hrsg.): Stadtdlexikon Dresden A-Z. Dresden 1998, S.256.

Lehmann が、鉱泉浴場 (Mineralwasserbad) 施設設置認可を受けた。これは当該地から採取される鉱泉水を利用して運営されたが、のちに枯渇したため、浴場運営のためにプリースニッツ川の水が利用され、1860年の廃業まで続いた。1766年に消費税顧問官のカール・クリスティアン・リンケ Karl Christian Lincke (1728～1799) がバートを取得後、彼の名前、またこの土地を1852年まで所有していたその子孫の名前リンケで呼ばれることになった。リンケのバート (以下 LB と略記) は浴場としてのみならず、主に野外コンサートや舞踏会、エルベ河のゴンドラ渡しなどを通し社交の場として人気があった。特筆すべきはドレスデンの劇場史における意義である。というのもリンケは1776年に東端の土地に常設の夏場専用劇場 (大きな角壁と基礎壁で支えられた木組み建築で500名の観客を収容できた) を建てたからである。1776年5月22日にアーベル・ザイラー Abel Seyler の俳優座によって柿落とし。続くシーズンは夏場に旅回りの劇団に貸し出した。週に2回から4回の頻度で、喜劇や笑劇、小規模のオペラなどが上演された。1790年から1816年まではヨーゼフ・ゼコンダ Josef Seconda (ドレスデンの劇場監督フランツ・ゼコンダ 1755～1833の兄弟) がその一座を率いてここを拠点とした。この一座には E.T.A. ホフマンが楽長として一時所属していた。歴史に名を残す公演も「リンケ・バートの劇場 (Theater auf dem Linckeschen Bade)」で行なわれ (例えば、1815年4月12日のベートーヴェン《フィデリオ》初版での上演)、名だたるアーティストが参加したが、とくに1817年から58年までドレスデンの宮廷劇場がここと賃貸契約を結んだ期間である (最後の公演は1858年9月24日)。その後劇場の建物は取り壊された。—1852/53年に土地が分割されてからは、LBのおよそ16000m<sup>2</sup>のレストラン用地は (一時『民衆庭園 (Volksgarten)』と名づけられた) 公共のコンサートホールおよび舞踏会場 (30mの奥行き、幅15mの広さで、1853年に建設されるも、1859年焼失、同年再建された) や新たに設けられたコンサート用庭園 (市立楽団の演奏会がしばしば行なわれた) などをそなえ、催し物会場として重宝がられ、



記念祭や各種団体の行事、会議、集会、舞踏会、夏祭りなどに利用された。—かつてのLBの面影を残すのは今日では「龍蛇亭<sup>うわばみ</sup> Drachenschänke」跡で、ここは1900年頃、LBのエルベ側の庭堀に接して何度も改築された旧園亭内に設けられた店であった。

主な記述は劇場および飲食店としての発展史に比重が置かれているが、シュナップの注釈ではっきりしなかった「レーマンのパート」への言及に注目すべきだろう。パートという名前がついた由来が、レーマンなる医者が発案による鉱泉（浴）場にあった点が記されているからである。2008年に出版され、翌2009年のフランクフルト書籍見本市でドイツ飲食業アカデミーの学芸賞、特別賞を受賞したマンフレート・ヴィレ『ドレスデンの飲食店——その始まりから現在まで。ドレスデンの飲食業に関する文化小史』には、リンケのパートの成立史に関し、「リンケのパートと白鹿亭（Lincke'sches Bad und Weißer Hirsch）」と一章が生まれ、さらに踏み込んだ記述がある。先に引用した『ドレスデン市事典』と重複する部分も多いが、最新の研究成果として関連する個所を引用しておく。

ノイシュタット側、要塞の黒門の裏手から少し入った場所にリンケのパート（das Lincke'sche Bad）があった。ここはドレスデンの市の端にあった最も古く、興味深い娯楽飲食店のひとつだった。プリースニッツ川をまたいだ場所に小園亭（Lusthäuschen）として1734年に建てられ、その後1753年から、葡萄酒・麦酒販売、製パン、屠畜、鍛冶場運営の許可がおりていた。

1763年医師のペーター・アンブロージウス・レーマン博士がそこに何棟かの小さな浴場施設からなるプリースニッツ・鉱泉浴場を開設した。ここは1824年には28の浴槽と夏用の宿泊施設を備え、1860年まで営業していた。1766年に土地は上級消費税顧問官カール・クリスティアン・リンケの手に渡った。20年の免税特権を利用し、リンケはここを娯楽飲食店へと

拡張した。

ドレスデンの音楽界の発展にリンケのパートは特別な役割を担った。そこでは1775年から夏の期間、とくに音楽劇を専門とする劇団が公演を行なった。ドイツ語の歌芝居、後にはモーツァルトのオペラなどを上演して、宮廷劇場でのイタリア音楽優遇によって生じた穴を埋めた。

1776年、リンケのパートに300席の「喜劇場」が建設された。これによって条件が整備され、当時流行の先端を行ったグルックやモーツァルト、ベートーヴェン、ウェーバーの作品がゼコンダの劇団（1790～1816年まで、ここと契約）によってドレスデン初演を迎えることができた。

著名な指揮者はC.M.フォン・ウェーバーやE.T.A.ホフマンだった。1820年から1830年までがリンケのパートの最盛期で、当時はドレスデンの社交生活に不可欠の場所のひとつだった。その後この地所は縮小された。劇場の建物は1858年にとり壊された。その前1853年に演奏会ならびに舞踏会用ホールができたのだが、1859年に焼失した。新しいスタートは1867年、「ヴァリエテ大劇場（Grand Théâtre des Varietés）」の開設で、これでドレスデンに新たな流れが生れた。長年に渡りこのパートはドレスデンのビーダーマイヤー風飲食店営業のお手本となったが、記念式典や団体の行事、会議や舞踏会、夏祭りの開催に人気の場所だった。

1901年にもここにはエレガントな葡萄酒レストランや穴倉風居酒屋、ホール、演奏会用庭園、ヴェランダがあった。1911年には広大な菩提樹のガーデンには15000（！）もの席があったらしい。1945年にすべてが破壊された。現在でも名残をとどめているのは、かつての大きな娯楽飲食店の建物だけである。

それが数年前まで営業していた龍蛇亭（Drachenschänke）である。その始まりは同じように古く1734年だった。当時エルベ河に面した庭堀に、後に園亭を備えた庭園が造られた。その園亭を「高貴な身分の人たちが気のおけない者同士のささやかなピクニックを催す」目的で利用した。そこから龍蛇山（Drachenberg）が開業し、ロマンティックなエルベの眺めの

満喫できる居酒屋が生まれ、その名物料理が「獲れたての魚のフライ」だった。後にそこが前述の龍蛇亭に代替わりしたが、残念ながら近年居住目的で改築された。…<sup>32)</sup>

「リンケのバート」への関心が高まったのは、このように比較的新しく、ヴィレの本の出版と同時期、2008年地元紙「ザクセン新聞 (Sächsische Zeitung)」の7月28日号にアンドレアス・テムの「コンサートとダンスがここで凱歌をあげる」と題する「リンケのバート」に関する記事が掲載されている<sup>33)</sup>。ただテムの記事ではここが「バート」と呼ばれた経緯には触れられていない。しかし『ドレスデン市事典』およびヴィレの引用からはっきりしてきたように、医師レーマンによる「鉱泉浴場 (Mineralwasserbad)」開設が「バート」なる呼称の起源のようだ。これが「温泉」だったかどうかはひとまずおくとして、水辺の「バート」という意味よりも、「鉱泉」の湧出に焦点が当てられた命名だったのである。ただ注意しておかねばならないのは、『市事典』で指摘された「鉱泉」の「枯渴」から「ブリースニッツ川」の水を利用した、という点である。実際広大な原野からエルベ河に注ぎ込むブリースニッツ川は水質の良いことで知られ、だからこそ歴史の当初からここに飲食業が発達する素地があった。現在でも一帯は「飲料水源」として「水質保全地区」に指定されている。〔写真2〕それでは『市事典』の「鉱泉浴場」記述の根拠となった資料は何だったのだろうか。

本稿で紹介したいのは、150周年を機に発行されたJ.E. ヴィーデマン著『リンケのバートの歴史』なる小冊子である<sup>34)</sup>。この文献には選帝侯

32) Manfred Wille: Dresdner Gastlichkeit – von den Anfängen bis zur Gegenwart. Kleine Kulturgeschichte des Gastgewerbes in Dresden. Dresden 2008, S.105f.

33) Andreas Them: Konzert und Tanz feierten hier Triumphe. In: Sächsische Zeitung, 28.07.2008.

34) J(ulius).E(mil). Widemann: Geschichte des Lincke'schen Bades.



写真2：旧「リンケのバート」側からブリースニッツ川とエルベ河の合流部を望む（筆者撮影：2010年8月）

から下された営業許可の文面も示され、かなり具体的に「リンケのバート」の実態が浮かび上がってくる。以下「鉱泉浴場」開設までの経緯とその後の展開についてヴィーデマンを参考に論述をすすめる。

後に「リンケのバート」と呼ばれるドレスデン・ノイシュタットの市門の外に位置した場所は、エルベ河沿いの広大な砂地の上にあり、土地登記上最初に借地権の確認ができるのが1734年から1742年までのゲオルク・フーベルト・フォン・ディースバッハ-ベルロシュ男爵（Freiherr Georg Hubert von Diessbach-Belleroche）である。この人物はザクセン軍歩兵隊の少将で、1733年からは選帝侯付きスイス傭兵警護隊の指揮官も兼務し

---

Zusammengestellt nach Auszügen aus dem Staats-Archiv. Dresden-N o.J. (1901). 以下引用にあたっては、本文引用末尾に（ ）で頁数を記す。なお本資料の存在など「リンケのバート」に関する論者の疑問に答えてくださったドレスデン工科大学のミヒャエル・ホーホムート博士にはこの場を借りて感謝を捧げたい。氏は現在「リンケのバートの劇場」に関する論考を準備中とのことである。Michael Hochmuth: Chronik der Dresdner Oper. Das Theater auf dem Linckeschen Bad. (in Vorbereitung)

っていた。1742年に66歳で亡くなっている。なぜ最初に軍人の所有になっていたかは、18世紀初頭ここがまだ「砂地の上の防塁」で「枢密軍事顧問官団」の管轄化にあったことと関係がある。後背地の林野は兵隊の営舎や演習地に利用されていた。土地開発と引き換えに10年から20年の免税でディースバッハに貸与された。宮廷建築師だったペッペルマン設計の旧市街と新市街<sup>ノイシュタット</sup>を結ぶ当時唯一の橋（現在のアルベルト橋）が新たに架け替えられたのが1731年であり、これを機に対岸のノイシュタット地区の開発に弾みがついたのだろう。ディースバッハは壁で囲いを築き、植林し、園亭を一棟建てた。ヴィレの記述に従えば、それが後に居酒屋「龍蛇亭」<sup>うわぼみ</sup><sup>35)</sup>となる建物と思われる。貴族の軍人が造園に精を出す、といえはゲーテの『親和力』（1809年）で三角測量を行なう少尉（後に大佐）のイメージがあまりに有名だが、「砂地」と呼ばれた不毛の地を測地・測量によって「新開地（Neuer Anbau）」として利用してゆくためには免税や専売特権などの優遇措置が必要だったことがわかる。

ディースバッハ将軍の死後、土地の権利は上席宮廷顧問官のクリスティアン・フリードリヒ・グライヒマン（Christian Friedrich Gleichmann）が継承するのだが、彼の宮廷使用人ペトルス・ヨーゼフ・ピエラルト（Petrus Joseph Pierrart）が1752年に建物と庭園を取得している。選帝侯の高官は、都市の所有物に対して領地譲受人（Lehnträger）を立てなければならなかったからである。グライヒマンは1757年に消費税顧問官（Accisrath）に就任しているが、これは後の地権者になるリンケの地位と

---

35) Drachenschänke を呑み助のホフマンに敬意を表して「龍蛇亭」<sup>うわぼみ</sup>と訳してみた。前述テムの新聞記事によれば店は「三匹の闘う龍」を看板にしていた、と言われる。『黄金の壺』の王室古文書管理官リントホルストは伝説の「火の精」Feuersalamander「火蛇」（石川訳）の化身という設定だ。ちなみに、このサラマンダーは黄色い体表に黒い筋の入った両生目のサンショウウオで、トカゲのような体型をしておりドレスデン近郊のザクセンのスイスにも生息している。ザクセンの紋章に用いられる色も伝統的に黄と黒で、Feuersalamanderの皮膚の色と同じである。



図4：ベルナルド・ベレット「アウグスト橋下流エルベ右岸からのドレスデン」(1748)

同じである。

注目されるのはピエラルトが政府に許可申請した項目だろう。1753年3月1日付けで公布された「特権」認可状には、「それまでディースバッハ園亭と呼ばれていた」場所での、「1) あらゆる種類の外国産葡萄酒とビールの保存、販売・営業権、2) パンならびに白い食品を焼く権利、3) 屠畜および4) 鍛冶場の維持権」(ヴィーデマン、11頁)が明確に記されている。つまりこれは、この土地での飲食店開業を前提にした裁可だった<sup>36)</sup>。

ここで注記しておきたいのはドレスデンの象徴とも言うべきフラウエン(聖母)教会や宮廷教会(カテドラーレ)が、ピエラルトが飲食業の認可申請した18世紀中庸に完成を見たことである。有名な建築家ゲオル

36) ドレスデンで市門の外側に飲食店・旅館が置かれた事情の裏には、疫病の防波堤として外からやってくる兵隊や旅行者を留め置く必要があったからで、新たにザクセン侯国が獲得したポーランドで1708年ペストが流行すると、市門の外側にあった飲食店・旅館は一時検疫施設としても利用されたという。Andreas Them: Gasthausgeschichten aus dem alten Dresden, Dresden 2010, S.19f.

ク・ペーア（1666–1738）がローマの聖ピエトロ寺院をモデルにアウグスト強健王の命で1726年に着工したフラウエン（聖母）教会は、その丸天井がはたして重量に耐えられるのか議論を呼びながらペーアの死後もその設計案通りに建設が進行され、アウグスト強健王の死（1733年）後1743年に完成する。またカトリック宮廷教会は強健王の息子アウグスト三世治下イタリア人建築家キアヴェッリによって1737年から建設が始まり、1756年に尖塔が完成する。イタリア人画家カネレットが描いた有名な風景画「アウグスト橋下流エルベ右岸からのドレスデン」（1748）〔図4〕に教会の塔の部分に足場が描かれている通りである。いずれにせよエルベ河沿いの景観を象徴する二つの教会が対岸から一望できるようになったのが、まさに18世紀半ばだったのである。まだ市外地であり、旧市内を結ぶ当時唯一のアウグスト橋からやや離れているとはいえ（現在直近にあるアルベルト橋が架かるのは1877年）、飲食店を開業するには絶好の場所である。もっともその後の七年戦争によってドレスデンの多くの建物がプロイセン軍の砲撃で破壊され（聖十字架教会の破壊は1760年）、1756年から1763年までは、ノイシュタット側の開発どころではなかった。

記録で次に登場する営業特権は、七年戦争後、医師ペーター・アンブロジーウス・レーマン（Peter Ambrosius Lehmann）が1763年に申請した「鉱泉浴場（Mineralbad）」設置願いである。この申請には他にも多くのドレスデン在住医師が署名していた。理由は「この土地から湧出する鉱泉水の使用によって」「背中の痛み、腰痛、頭痛、虚弱、疲労、関節痛、脚のけがなどの治療」（ヴィーデマン、14頁）に役立てるためであった。許可状には「黒門前のエルベ河畔に位置する旧ピラルディ庭園（Pirrardischen Garten）」に「その地の利とそこに存する鉱泉水を顧慮して、一般公衆のために浴場を設置する」申請、と記されており、ピエラルトの名前が誤記されているが、「旧（vormals）」とあることから、地権者が飲食店の営業から降りたような書き方である。認可状によれば、むこう十年の特権とは、他業者が「この地区において四分の一マイルの周辺に



図5：レーマンのバート

鉱泉水によるこの類の公共浴場 (ein dergl. Öffentliches Bad von mineralischem Gewässer) を設置する」のは認められない旨が明記されている (ヴィーデマン, 14 頁)。これが「レーマンのバート」の始まりで、後に代替わりしても「バート」の名称が残った所以である [図5]。「公共浴場」の営業許可は 10 年ごとに更新され、1849 年の申請が最後となっているが、浴場管理人 (Badereipächter) の人事記録から、1860 年まで営業が続いていたようである (ヴィーデマン, 19 頁)。

この「レーマンのバート」の施設と飲食店の敷地を、浴場営業許可から 3 年後の 1766 年に購入したのが、カール・クリスティアン・リンケ (Karl Christian Lincke) だった。興味深いのはリンケが、浴場の営業許可に署名したザクセン侯国保養地管理責任者のクサーヴァー (Xavar) 王子の秘書だったことである。王子は七年戦争後、選帝侯に就任間もなく急死したフリードリヒ・クリスティアン侯に代り、1763 年からザクセンの行政を一手に引き受けていた。リンケは 1765 年からは臨時消費税顧問官に就任している。リンケは 1799 年に亡くなるが、ナポレオン戦争のさな



か、1807年にその息子フリードリヒ・ルートヴィヒ・リンケ（Friedrich Ludwig Lincke）が土地の権利を相続し、1852年までリンケの一族が所有者として名を連ねてゆく<sup>37)</sup>。リンケの名は、彼が土地の権利を獲得して10年後の1776年に建てた「夏場の劇場（Sommer-Theater）」と切り離して考えられない。劇場の建物は大部分が木組みで、床は板張りだった。当初は「入浴客の保養のため」（ヴィーデマン、19頁）ヴァイマルの宮廷劇団ザイラーが5月初めから9月末まで上演を続ける、という名目で許可が下りたのである。その後はさまざまな旅芸人の団体に貸し出され、1790年から1816年まで、ホフマンが楽長に就任することになるヨーゼフ・ゼコンダの巡回歌劇団が、公演をここで行なうようになるが、私設劇団としてはゼコンダが最後の借り手だった、というのもライブツィヒとドレスデンとを交互に公演していた彼の一座は、1816年ライブツィヒが市独自の劇場を運営するようになり、拠点をそこに移したからである。またドレスデンの宮廷劇場の方も新たにドイツ語歌劇部門を設け、そのトップにカール・マリア・フォン・ウェーバーを据え、イタリア物偏重の流れを変え始める。こうして1817年から1848年まで「リンケ・バートの劇場（Theater auf dem Linckeschen Bade）」は宮廷劇場と契約を結んだのである。

ドレスデンの劇場史における「リンケのバート」の意義は多くの文献で論究されており、ここでは詳しく論じない。ただ「バート＝浴場」との関連で、浮かんだ疑問と仮説を述べておくにとどめる。入浴施設の傍に夏場の劇場を建てたのには、当時徐々に増えてきた鉱泉保養地に劇場や舞踏場などの遊興施設が併設されていた例にならったのであろうし、ドレスデンからも近かった本格的温泉保養地カールスパートも手本として念頭にあったにちがいない。しかし「リンケのバート」は旧市内から近いとはいえ、対岸で城壁の外側、いわば町外れに位置する。浴場施設に宿泊もできる建物があったとすれば、ここが客演する劇団女優のパトロンとなった宮廷人

37) Wiedemann:Ebenda, S.8.

や軍人がお忍びで密会するには絶好のロケーションだったのではないかという疑いである。参考文献にはそれをほのめかず記述はないのだが、18世紀後半の劇場の女優という存在が、必ずしもよい評判ばかりでなかったことはシラーやゲーテの劇場改革案を持ち出すまでもなくよく知られている。

ヴィーデマンは公文書に基づいてリンケのバートをめぐる歴史を概観しているが、本稿で明らかにしたいのは、はたしてここが日本の「温泉」のような場所だったのか、という点である。ヴィーデマンも「バート(Bad)」の営業形態、つまり入浴に関する具体的な記述を求めて、いくつかの文献にあたっている。例えば、ドレスデンの年代記作家で選帝侯の図書館司書だったカール・ヴィルヘルム・ダスドルフ(Karl Wilhelm Dassdorf)は1782年の報告(『選帝侯の首都ドレスデンとその周辺地の特筆すべき風物誌』, ドレスデン, 1782年)において、次のように描いている。

この浴場の庭は広くはないが、とても快適な区画がいくつかあって、すがすがしい、見晴らしの良い眺めを愛する人には格別である。この一帯の眺望は抜群であるからだ。庭園の壁に沿ってエルベ河岸方向に設けられた園亭からは、エルベ河や川沿いに上流までが見渡せ、夏の間は身分の高い人々がささやかで気おけないピクニックに訪れる。なぜならここには良いレストラン(eine gute Bewirthung)があるからだ。浴場の施設はとても快適で廉価。ここでは家族連れ用または個人客用に実に快適な夏用住居が安い値段で提供されている。(ヴィーデマン, 16頁以下)

この記述でも「入浴」の実態がさっぱり浮かび上がってこない。ヴィーデマンが興味深い記述と紹介するドレスデンの年代記作家ハッシュェによる1783年頃の報告によれば、「リンケのバート」には庭園の真ん中に四角い切石を積んだ石造りの浴場施設があり、内部は「仕切られた独居房のような、小部屋の集まりのよう」になって「個人の好みで、エルベ河の水(傍

点筆者)を冷たいまま、あるいは温めて浴槽に入れることができ」たようだ。「1時間2グロッシェンで封蝟用の印章を、浴場管理人(Bademeister)から買う」システムだった。ちなみに、1782年のドレスデン市による飲食業規定では、「野菜を添えた肉料理1人前が2グロッシェン」「燭台付きの宿泊ベッド代(暖房費や特別室は除き)最高で2グロッシェン」、「ミルクと砂糖をつけたコーヒー1人前が3グロッシェン」「砂糖入り紅茶1人前2グロッシェン」以上の値段を請求してはならない、とされていた<sup>38)</sup>。この規定はコーヒーが当時いかに贅沢品であったかを示す資料として紹介されているのだが、リンケのバートの入浴料金は宿泊代相当ということになる。入浴施設の庭園では「週に二度音楽会」が開かれ、木組み建築の「大広間」は団体が食事をする場だった(以上、ヴィーデマン、17頁)。ヴィーデマンもやはり「浴場」としてのありかたに大いに関心があったようで、1830年代の年代記作家ウィルヘルム・シェーファー博士の記録を基に、「プリーヌニッツ川の水(傍点筆者)を利用した7つのシングル浴室、2つのダブル浴室、1部屋の三人用浴室」があったとされ、また医療地誌学者(der medizinische Topograph)のマイヤー博士の1840年の報告では、「アントーンシュタット〔筆者注—当時の行政区としての呼び名〕の施設にはプリーヌニッツの水を使った16の浴室が設けられていた」と紹介している(ヴィーデマン、17頁)。

ここでようやく見えてきたのは、「バート」は当初療養目的の浴場施設としてスタートしたものの、当てにした「鉱泉水」は「プリーヌニッツ川」や「エルベ河」の水となり、むしろガーデン・レストラン、庶民向けの劇場を集客の目玉とした盛り場へと変貌したことだろう。ヴィレがその最盛期を1820～30年代としているのも肯ける。都市の拡大にともない、他にも多くの魅力あるオープン・エア型のレストランが誕生し、バートからさらにエルベ河上流にあった「フィントラターの葡萄園」や市内の「大庭園(Großer Garten)」、エルベ左岸「ブリュール高台」などで営業し

38) Manfred Wille: A.a.O., S.85.

た大規模な飲食店が上流名士たちの人気を集め始めたからである。さらにノイシュタット出身の医師兼薬剤師フリードリヒ・アドルフ・シュトゥルーヴェ (Friedrich Adolf Struve: 1781-1840) が、カールスバートやマリーエンバートといった温泉地での経験を活かし、人工的に鉱泉水を製造する試みに成功し、1820年にドレスデンで飲泉所 (Mineralwasseranstalt) を開いたのである。症状別に成分を変え、匂いや味、温度の違う水を提供し、ちょっとしたブームを巻き起こした<sup>39)</sup>。リンケのバートの競争相手になったことは想像にかたくない。

こうして辿ってみると、「リンケのバート」というドレスデン特有の地名に、日本語の「温泉」という訳語を当てることがはたして適切かどうか、大いに疑問が残る。Badの訳語としては実際に「浴場・風呂」があったのだから、自動的に「リンケ浴場」もしくは「リンケ風呂」とするのが直訳的解決法だが、おそらくこなれた日本語という意味では、石川訳のように「リンケ温泉」とした方が日本人の語感に訴えるものがあるのは否定しない。しかしすでに縷々傍証したように、「リンケのバート」は私たちが「温泉」という日本語で想起するような場所ではない。次稿では、この地名が誕生した18世紀中葉からホフマンが生きた19世紀初頭のBadのありようを辿りながら、「リンケ温泉」なる訳語の是非を問う。

(次号に続く)

---

39) Horst Prignitz: Wasserkur und Badelust. Eine Badereise in die Vergangenheit. Leipzig 1986, S.169.